

## JASIS2013 見聞録

9月4日（水）から9月6日（金）にかけて、千葉県の幕張メッセにてJASIS2013が行われました。開催期間中は、あいにくの雨模様で首都圏近郊の鉄道が一部遅延していたようですが、会場内は多数の出展者や訪問者で活況でした。今回の取材は、最終日の6日（金）に行いました。まず最初に、事務局本部でJASIS委員会委員長の野元政男氏、事務局長の濱崎勇二氏、国際委員会委員長の川本健志氏、事務局の池田賢仁氏から、JASIS2013についてお話を伺いました。

JASISは、分析展/科学器機展の合同展を発展させた形で昨年からの始まり、今回は第二回目の開催になります。テーマは昨年に引き続き「未来発見」であり、「JASISが、日本ならではの高度で繊細な技術やモノづくりの発想があふれる場所であり、この分野におけるアジア最大の展示会として、イノベーションを生み出し、将来のビジネスにつながる発見がある場所」というコンセプトの元に、従来までの展示会、新技術説明会、コンファレンスに加えて新たな企画を様々な立ち上げられたそうです。今回の取材記では、新たな企画などを中心にJASIS2013について報告していこうと思います。

まず、特別企画である「メディカルイノベーションゾーン」について紹介します。ヒトゲノム計画以降に進展が著しい先端診断技術分野は、機器分析分野と医療分野の中間に位置づけられています。このような中、「分析市場から先端診断市場へのビジネス展開を考える」ものとして、「多くの近未来先端診断市場への参入を計画する企業や研究機関などに、想定できる問題点や解決策を討議する場を提供する」ために、経済産業省ほか、多方面の有識者による基調講演、パネルディスカッション、参加企業25社によるアライアンスプレゼンテーション、ポスター展示、パートナーング面談コーナーを開催されたそうです。取材時には終わっていたために残念ながら参加できなかったのですが、パネルディスカッションについては満席状態で活況の内に終了したそうです。また、これまでの分析展/科学器機展と異なる新たな企業やユーザーもターゲットにされているそうで、実際にアライアンスプレゼンテーションの大部分（22件）は非会員の企業によるものでした。来年も本企画の拡充を図っていくそうです。

JASISは、国内は当然としてアジア・ヨーロッパなどグローバルな視点での取り組みも活発です。例えば、会場内での国際コンファレンスなどのほかに、海外での

取り組みも活発です。今後のグローバル展開の中で、海外からの留学生の参加を増やすべく、学会とのタイアップも含めた企画の立ち上げも考えているそうです。

さて、この記事をご覧になっているみなさんはJAIMA、JASISに参加されたことはあるでしょうか？ 参加されたことがある方でしたら、広大な会場に設置されている展示ブースを探すのに苦労された経験があると思います（写真1）。ちなみに、本年の出店社数と小間数は昨年とほぼ同様の446社、1359小間であり、総来場者数は23,034名でした（JASIS2013のHPより）。これまででは、冊子の地図から展示ブースを探していたのですが、本年はスマホアプリをダウンロードすることで、



写真1



図1



写真 2

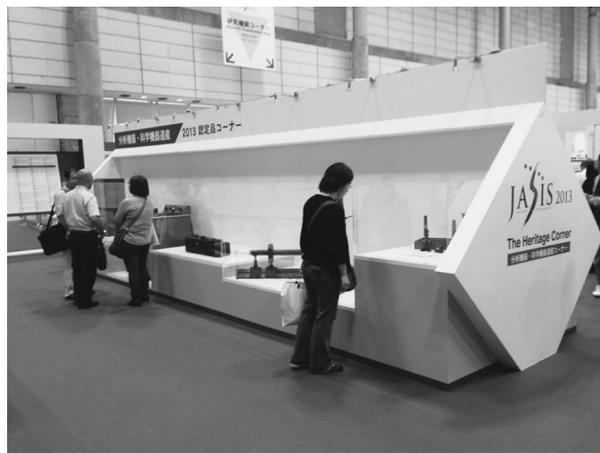


写真 3

展示企業や会場案内などを検索できるようになりました(図1, JASIS2013のHPより)。実際に、記者の一人も使ってみたのですが、簡単に目的ブースが見つかるほかに現在地も分かる非常に便利なアプリです。また、新技術説明会やコンファレンスなどのプログラムも検索・表示できます。まだ利用されていない方も、来年は活用してみたいはいかがでしょうか。

続いて、本年度の新企画を中心に会場内の様子を紹介していきます。「メディカルイノベーションゾーン」は会場の右奥に設置されていました。取材時には、アライアンスプレゼンテーションが開催されていましたが、写真2のとおり、ほぼ満席状態でみなさま熱心にプレゼンテーションを聴かれていました。また、ポスター展示をされていた企業の方に伺ったところ、JAIMAを通して初めての出展だったそうですが、多数の訪問者にお越し頂いているということでした。事務局で伺ったように、新たな診断技術分野への関心の高さが垣間見えました。

昨年の第一回 JASIS から始まった「分析機器・科学機器遺産」の展示が写真3です。「分析機器・科学機器遺産」の認定制度は、日本国民の生活・経済・教育・文化に貢献した貴重な分析技術/分析機器や科学機器を、文化的遺産として後世に伝えることを目的に、社団法人日本分析機器工業会(JAIMA)と一般社団法人日本科学機器協会(JSIA)の合同で創設されたものです。2013年は26件の応募の中から15件が認定され、7月26日に認定品が発表されました。認定品はいずれも、「当時、世界に誇る機器・技術であり、次世代に継承されるべき科学のちから」(JASIS2013のHPより)ということで、会場入り口付近に展示スペースが設けられていました(写真3)。どの機器も、PC制御さえできれば現役で使えそうなほど完成度の高いものです。機器開発の状況や手動の機器分析を思いながらでしょうか、訪問者の方々が一つ一つの機器をゆっくりと見て回られているのが印象的でした。



写真 4

本年より始まった企画の一つに「マイナビラウンジ」があります。これは、JASISに参加した分析機器、科学機器、計測機器に興味のある理工系大学生、大学院生向けに、業界研究の場として活用できるように設けられたものです。ラウンジ内では、マイナビ専任スタッフがブース訪問のマナー、会場の効率良い周り方、展示会を業界研究に活かすポイントなどを丁寧に説明されていました(写真4)。また、自分の名刺を作るプリンタなどが用意されており、学生は、ここで印刷した名刺を持って展示会場内を散策しているようでした。スタッフに伺ったところ利用はかなりあるようでしたが、ここでの説明を学生が有効活用しているか気になるところでした。しかし、将来的に増加が予想される学生来場への対応として、今後の発展が期待されます。

コンファレンスでは、JAIMAセミナー「これであなただも専門家 ○○編」などの初心者向け講習会、学協会や団体が主催する先端分析機器・技術や調査報告に関する講演、および国際会議が3日間にわたり開催されていました。その中で、昨年に引き続き開催された「英国王立化学会(RSC)東京国際コンファレンス2013—バイオ化学、バイオ物理と分析化学—」について紹介いたします。この国際コンファレンスでは、国内外の著名な

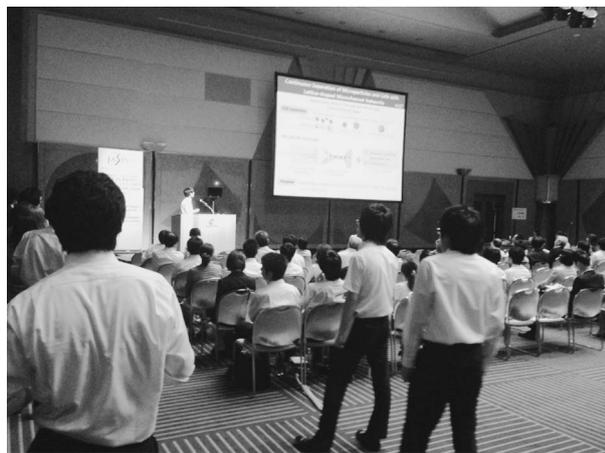


写真 5

研究者による講演とポスター発表が行われており、ポスター発表件数は昨年を上回る 131 件ということでした。訪問時には、写真 5 のように多数の参加者の中で、ポスター発表者によるフラッシュプレゼンテーションが行われていました。引き続き行われたポスターセッションにおいては、留学生など海外からの発表者を含めた活発な討論が見られました。このほかにも、U. S. シンポジウム 2013、国際ナショナルテクニカルフォーラム 2013、韓国シンポジウム 2013、中国フォーラム 2013、韓国フォーラム 2013 といった国際コン

ファレンスが開催されていました。事務局の方のお話にもありましたが、JASIS のグローバル展開の中で国際コンファレンスがどのように発展していくのか楽しみです。

新技術説明会については、過去最大の 342 テーマということで、アパホテル&リゾート（東京ベイ幕張）、ホテルニューオータニ幕張の 2 会場で開催されていました。総聴講者数は 15,047 名ということであり、昨年同様に多くの人でにぎわっていたようです。

JASIS の 3 本柱は展示会、新技術説明会、コンファレンスです。JASIS を真に国際的なイベントへ発展させていくためには、個々の内容を充実させるとともに、それぞれの連携を強めていくことが重要と伺いました。なお、来年の JASIS2014 について事務局で伺ったところ、テーマは引き続き「未来発見。」であり、世界へ向けたまなざしが印象的なポスターも拝見させていただきました。JASIS の WEB ページに既に掲載されていますので、ぜひご覧ください。

最後に、取材にあたって貴重な時間を割いていただいた日本分析器機工業会および日本科学器機団体連合会の諸氏ならびに事務局の皆様、この場を借りて御礼申し上げます。

〔株）原製作所 高東智佳子  
茨城大学理学部 山口 央

## 新刊紹介

### ICP 発光分析

—分析化学実技シリーズ 機器分析編 4—

（公社）日本分析化学会 編、千葉光一ほか 著

本書は、分析化学実技シリーズの機器分析編として、ICP 発光分析装置だけを取り扱ったものである。ICP 発光分析装置の説明は、簡易的な教科書では、ICP-MS とともに概説してあることが多いが、本書では、著者による前書きにもあるように、基礎となる情報を可能な限り盛り込んだ内容となっている。構成としては、序論（1 章）、誘導結合プラズマの特性（2

章）、ICP の装置と分光装置（3 章）、各種干渉などの分析上の問題点（4 章）、試料導入法（5 章）、試料の前処理（6 章）、応用例（7 章）から構成されている。特に 2 章においては、実際に用いているプラズマの挙動・特性や、プラズマの温度が高いだけでは説明できない高効率な励起機構など、プラズマに関する内容も詳しく説明されている。また一方で、ネプライザーのつまりや、各種干渉など、実際の測定で問題になる事象についても丁寧に解説されており、ICP 発光分析装置を使っている研究室においては、ICP 発光分析の基礎を理解し、実用利用するために十分な内容を含んでいる。応用例は、鉄鋼材料、非鉄材料、セラミックス材料、有機材料、土壌・底質、廃棄物・焼却灰など、ICP 発光分析が威力を発揮する試料を中心に述べられており、重宝する一冊ではないかと思う。

（ISBN978-4-320-04398-5・A 5 判・233 ページ・2,900 円＋税・  
2013 年刊・共立出版）